

第8期 第5回 静岡市行財政改革推進審議会 会議録

1. 日 時 平成31年1月15日(火) 10:00~12:00

2. 場 所 静岡庁舎 新館9階 特別会議室

3. 出席者 【委員】

田形和幸会長、岩井泰次郎委員、植田真委員、内山和俊委員、  
小泉祐一郎委員、小島孝仁委員、坂野真帆委員、杉山茂之委員、  
鈴木貴子委員、西尾真治委員

【行政】

岡村文化財課長、矢澤参与兼文化振興課長、  
宮本登呂遺跡担当課長兼登呂博物館長、永田芹沢銈介美術館長、  
草分駿河区役所地域総務課長、  
三宅総務局参与

〔事務局〕

遠藤総務課行財政改革推進担当課長、上原副主幹、兵庫主査

4. 会議内容

(1) 開 会

(2) 議 事

登呂エリアの「目指す姿」の実現に向けて

(3) 今後のスケジュール

(4) 閉 会

審議会内容は以下の会議録のとおり

田形和幸会長：早速だが次第2の議事に入る。前回までに皆様からは多種多様なご意見をいただいた。今回はそれらを踏まえ、現時点でどのような取組を行うことが考えられるか市から説明があるため、また活発な議論をいただきたい。それでは資料1および資料2について説明をお願いしたい。

≪略：資料1により事務局説明≫

《略：資料2により登呂博物館、芹沢銈介美術館説明》

事務局：補足になるが、現実にはどうしても制限がかかってくる。登呂博であれば、カフェというときに、登呂エリア全体が文化財になっているから、文化財保護法の規制がかかっている。そのため建物自体を新しく作ることが難しい。飲食というときに、キッチンカーだとか、資料の方に麻機緑地で社会実験的に12月から初めてグランピックというものをやった。このような移動式のものであれば飲食の場所を設けることも可能だ。こうした方向性なら考えられるのではないか。芹沢銈介美術館に関して、建物の中で、呈茶が限界であるという話があったが、以前飲食をやったときに、食べかすが落ちていて作品自体を虫が喰ってしまったということがある。作品自体が損なわれてしまうと美術館の存在意義自体が揺らいでしまうので、食べるということが難しい。限られたスペースで飲み物を提供するというのが限界ではないか。いろいろと制約があるなかで、なるべく前向きに改善をしていきたいというのがこちらの思いだ。いま登呂博、芹沢美術館それぞれから説明させていただいたが、そういうことではない、もっとこういう方策があるのではないかとということがあれば、ぜひ意見をいただきたい。

田形和幸会長：事務局と両館長から説明していただいたが、どのような点からでも結構なので意見をいただきたい。人を呼び、ある程度滞在していただくためには飲食が必要だという意見があった。施設自体を新たなものに作り直すことは文化財保護法の規制で難しいということだった。できることとしてどんなことがあるのか、両館長が考えていることに何かプラスしたほうが効果があるのではないかと、そういうことを伺いたい

小泉祐一郎委員：飲食は登呂博物館の建物の中であればいいのか。

登呂博物館長：1階であれば大丈夫だ。

小泉祐一郎委員：古代米のお米を土器で炊いて無料でいただくのが、体験の中で一番いいと思っているのだが、あの登呂の公園部分、野外のあそこでやる分にはいいのか。

登呂博物館長：公園内に飲食の規制をかけているわけではないので、公園では飲食は可能だ。

小泉祐一郎委員：あくまで、展示品への虫の防止だ。展示品への影響を考慮してということではよいか。

登呂博物館長：そのとおり。

小泉祐一郎委員：県立美術館の場合も生花はだめだ。虫が入るから。生ものなどは一切使わない。そもそもの質問になるが、登呂エリアの捉え方について、登呂遺跡の本体の周りがあるやまだいちという飲食店や登呂旅館など、周辺も含めて登呂エリアだと思っていたのだが、聞いてみると、登呂公園の中だけを言っているような気もする。言葉の定義をはっきりさせたい。駐車場も含めた水田など、登呂エリアというのは、市が管理している部分を登呂エリアというのか。

事務局：はい。狭義の登呂エリアというか、あくまでも登呂遺跡を中心とした、市の影響が及ぶ範囲と考えている。ただ、諮問としては地域の活性化ということも当然入って

る。登呂エリアをどうにかすることによって周りに波及させていきたいと考えているので、諮問の対象範囲としてはその周辺も含むとご理解いただきたい。

田形和幸会長：規制がかかる部分は建物の中、および周りの駐車場も含めて市の管理されている部分ということでしょうか。

事務局：そのとおり。

田形和幸会長：駐車場から歩いてくるときに食事を出すような古い民家があったが、あれは民間の方がやめてしまったのか。

小泉祐一郎委員：もともとやよい茶屋さんとやまだいちさんがあった。両方とも駐車場の北側のところにお土産屋があり、いまの皇太子がお見えになった時にそこでお買い物をされたのだが、いまは営業されていない。建物も閉めている。登呂遺跡の北側のやよい茶屋さんも営業していない。やまだいちさんは営業されている。

田形和幸会長：エリアの中に喫茶店やレストランなど、あらたなものを作ればいいといっても博物館であり、重要文化財であるという中では当然いろいろな規制があり、なかなかできない。いまの話の中でエリアの周辺の飲食店がなぜやめたのかと言えば、来る人が少なくて営業が成り立たないからやめてしまったのだ。残っている建物の活用はできないのか。本来の賑わい、来場者があれば、民間も巻き込んでやることも可能だ。あくまでも市だけでやるのではなく、そういう方たちを巻き込んで、いろいろなイベントなどをやって来場者を増やしていく。登呂エリアが活性化したら、レストランや喫茶店は別にして、民間の敷地の中であれば自由にできるわけだ。

小島孝仁委員：上空から見た航空写真で、どこが建築不可のエリアなのかを大きく示していただけないか。駐車場には建築できるのか。

事務局：駐車場はできる。航空写真ではないが、建築不可のエリアを示すものはすぐ用意する。

小島孝仁委員：私は不動産業ということもあり、まず、上から見てローディングという考え方をして、敷地の中をお客さんがどういう導線で動いていくか、動きのストーリーを考える。規制がかかる所とかからない所を明確にしたい。移動式のキッチンカーもよいが、キッチンカーではいままでここで議論していた、カフェがあるべきではないかという役割を満たすには難しいと思う。やはり常設のカフェが必要だと強く思う。既存の登呂博物館の1階を、いま多目的エリアのような所とミュージアムショップとカフェが区別されているが、それをワンフロアで一体にしてしまい、通常はカフェの席として営業し、何かイベントやワークショップがあるときはテーブルをうまく移動しながら使えるようにすることが一つ方法としてある。博物館の手前の広い空き地、土の状態の所にキッチンカーを並べて、竪穴式住居を並べると連続性が生まれてくるかもしれない。その脇に樹木をはやしていくと高層住宅も消せる。「弥生時代にタイムスリップ」というコンセプトは非常にいいと思っているから、西側、左手側のアパートや住宅の雰囲気を通して、駐車場からそんなイメージを感じさせるようなことができないか。芹沢銈介美術館は現状のままでも立派な建物だと思うので、投資をするのであれば分散するのではな

く、まずは登呂博物館に集中するのがいいのではないか。

小泉祐一郎委員：景観形成ということで、駐車場の前の登呂遺跡水田跡のイメージが悪い。登呂遺跡に来たという感じがしない。正月に実家に帰ってもう一度見てみたりしたのだが、登呂会の皆さんももとは農家だったが、いまは農業をやめていて、後継者の人たちは基本的に農業をやっていない人たちだ。だから登呂会でどうのこうのというのは難しい。地元にあまりこだわらず、農業できちんと水田を管理できるところに最低限の維持費を出していく。そこに地元の人がいろいろと関わるのは良いのだが、景観を作るという最低限のところはしっかりやらないと、着いたときに「弥生時代にタイムスリップ」した感は全くないし、水田という感じもしない。やはり、行ってみたいと思わせ、こっちに向かわせないと始まらない。今回のテーマではないが、会長からお話のあった、民間の土地の放置されている部分についてだが、例えばあそこに不適切な建物ができたりするとなかなか難しいので、あそこの土地をどうするかというのは課題だと思う。富士宮市の場合は、世界遺産になった浅間大社の周りにマンションができるとなれば、その土地を購入している。10年前から購入していてこの前も購入した。行政財産で買っているから議会の反対は強い。そこに、加和太建設が地ビールのレストランを造ったり、貸すことによって土地利用を規制するという形で、民間誘導と浅間大社周辺の景観形成については富士宮市の場合は力を入れてやっている。あそこは特殊なところだが、そういう意識だけでも静岡市も持っておく必要があるかもしれない。

事務局：いま小泉委員からお話のあった水田エリアについて、登呂博物館が水田の復元を考えているので、紹介する。

登呂博物館長：現状、畑になってしまっている部分があり、水田として使われていないから、いまずぐに水田にするというのは見通しが立ちにくい状況だ。いったん耕運機を入れて、水田の形になるように協力していただける団体を探しているところだ。それをするお金が付いて、あとは以前ご指摘のあった水路について、水を流すためにも電気代が必要になるが、そういうところもクリアになっていけば、水田化に向かって進めていけると考えている。

小島孝仁委員：水田が再現された際に、その中に遊歩道を作るのは問題ないか。

登呂博物館長：現在の水田が、発掘されて出た当時の水田の遺構の形を忠実に再現している。なので、実際になかった遊歩道を水田の中に作るのはできないと考えている。

文化財課長：ただ、大きなあぜがたくさんあるので、あぜの部分は遊歩道として利用することはできる。いま言った周りの遊歩道というのはあくまでも公園としての遊歩道だ。中に水路があり、そこから大きなあぜが出ているので、その水路には橋をかけているので、中をある程度自由に動ける状況にはなっている。ただ、そこを整備した後、お米を植えるというところまでの活用をしてこなかったのが、水田らしいものはあるが、水田にはなっていないと、雰囲気としては田んぼにもなっていない。遺構の復元だけはしているが使われていないという問題がある。あぜを使えば歩くことなど、いろいろな動きは可能だ。

小島孝仁委員：あぜに沿って柱を打ち込んで、その上を木製のちょっとした小道のようなものを作っていくというイメージだが。ここに立って、この資料にあるような写真を撮りたいと思うのだが、この写真は水田に入らなければ撮れない。

文化財課長：現在はこのくらい細かくあぜができていて、太く書いてあるところは全部このまま歩いて行ける。小さなあぜにも入って、いろいろなところで写真を撮ることはできる。わざわざそういう風にしなくてもいいのではないかと考えている。ただ、雨が降ると土だからぬかるむ。その対応として板を敷くというのは考えられる。

小島孝仁委員：いまディズニーランドには写真を撮る場所が明示してあるらしい。ここからこちらの方向にスマホを向けて撮ってくださいと、そういう仕掛けも面白い。

小泉祐一郎委員：稲の色が異なる古代米を使った田んぼアートというものがある。田んぼアートは南側でもやることは可能なのか。

登呂博物館長：南側でもやることは可能だ。現在の場所にあるのは屋上からよく見える。南側にした場合は、上からよく見えないということがあるが、やることは可能だ。

小泉祐一郎委員：よく田んぼの周りに仮設の物見台を作ってお金を取ったりする。お金を取るかどうかは別にしてだが。

岩井泰次郎委員：ディズニーランドの話が出たが、視察に行ったときに、ディズニーランドは駐車場からディズニーランドになっているという話をした。スタッフや誘導員はもうディズニーランドの人だ。しかし、登呂遺跡の駐車場に来て登呂遺跡は始まっていない。それから、昔ディズニーランドができたころはアトラクションごとのチケット制だったが、いまはパスポート一本だ。認知度や来場者が低下しているという状況の中で一番もったいないのは、芹沢美術館に来たのに登呂を見ていないとか、登呂に来たのに美術館に行かないということだ。割引などはやめてしまって、共通券に一本化してしまってはどうか。せっかくそこまで来た人たちを片道で返してしまうくらいだったら共通にしてはどうか。週末に都内にいると、東京メトロが石原さとみを起用した広告キャンペーン「Find my Tokyo」というメトロを周遊させる仕掛けを目にする。この沿線に行くところという老舗がある、こういう体験ができると、普段東京にいても行きたいと思わせる誘発がある。静岡にはどんなことがあるかと調べたが、静岡鉄道が三保のパッケージや船のパッケージをやっているようだ。そういうパッケージ化をやる。一日バス券なども存在したが、例えばそういうものをうまく使って、このコースを行くついでに登呂遺跡に降りてみようとか、久能山東照宮に行く間に行ってみようとか、パスポートでついでを発生させる。登呂に来たら芹沢美術館に来てもらう、というようなインフラの仕掛けをやったらどうか。

田形和幸会長：この前上田市に行ったときに、その券でほかの施設も入れると言われたから、どうせだったらと寄ってみた。値段的にもそんなに高い金額ではないからそういうことも可能ではないか。それから皆さんが言われているように景観というのは大事だ。そこに来たというイメージを漂わせて、そこに行ってみたいと思わせなければならない。先ほど小泉委員から出た周りの景観作りに民間を活用するということがだが、しずお

か信用金庫には登呂支店がある。自前で土地と建物を持っていたのだが、北側に土産物  
を売るお店と食堂があり、4年前にそこを購入しようと思った。せっかく登呂遺跡があ  
るのだから、登呂遺跡の目の前に支店を作ろうと思ったのだが、結局売ってくれなかつ  
た。民間の方が売ってくれるかとか、協力してくれるかという中で、たぶんお金に困っ  
ていなければ売ってくれないし協力してくれない。家賃が入るとか、そういうことであ  
れば周りを巻き込んでできるかもしれない。

西尾真治委員：違う観点になるが、いま全体像をあらためて見たわけだが、人がたくさん  
訪れるようになる、それによって稼げる施設になる、という大きなフレームとして書い  
てある。それはその通りかもしれないが、先ほど館長が本質的なことをおっしゃった。  
そもそもではどうやったら人が訪れてくれるのかと考えたときに、人が訪れるというこ  
とが出発点ではなく、もともと静岡市が持っている登呂遺跡や芹沢銈介さんに市民がみ  
な誇りを持っている、ここがあって初めて人が呼べるという話があった。その部分をき  
ちんとやっていかなければならないのではないか。どうしても施設の単位で何をするか  
という観点が中心になってしまいがちだが、もう少し視点を広げて、静岡市民にとって  
の登呂博物館、芹沢銈介がどういうものなのかということをきちんと考えた方がいい。  
例えば登呂博物館では、先ほど館長が遺跡発見のストーリーを広げて行って市民が誇り  
を持ってもらうことが大事だとおっしゃったが、本当に本質的なことだ。そのための  
施策がきちんと位置付けられていないと、その後の活用につながらない。活用の場  
面に価値や魅力を市民が知っている、自ら発信したいと思っているというような施策が  
必要ではないか。芹沢美術館の方も同じで、知名度を高めるという観点で書いてある  
が、知名度というよりは、市民の中で芹沢銈介さんに対する誇りを持つ、価値を正しく  
認識するということが大事ではないか。価値が十分認知されていないので再認識して  
もらうと書いてあるが、再認識というよりは、新たに認識を掘り起こしていくことが  
大切ではないか。坂野委員の発言を聞いているとすごく芹沢先生に対する愛を感じ  
る。芹沢先生の価値を正しく認識している人からの話、そういう視点からの発信だと、  
市民の心にも響いていく。そういう観点でのPRも考えていく必要がある。

坂野真帆委員：現状できることには限界があるということだが、そこを破っていくために  
この行革審の俎上に上がったのかなとも思う。民間の力と連携しながら、打破する部分  
があるといい。登呂博物館は特にそうだと思うが、学習施設という側面が強いと思う。  
いまこの委員会の中で出ている話を聞くと、やはり大人の方が来ても楽しめるような、  
大人も納得できるクオリティを保つことが大事だと感じる。子ども向けに分かりやすく  
するのはいいが、レベルを下げるということではない。本質を分かりやすく伝えること  
は子どもでも大人でも同じだ。そういう意味では体験の質の向上には大いに期待した  
い。学校の見学とは違い、大人の方がそこでの時間をどう楽しむかという意味合いで言  
うと、見ることだけではなく、そこでゆったりと過ごすとか、昔のことに思いを馳せな  
がら妄想を膨らませて過ごすとか、あるいは写真などを撮るとか、子どもの社会科見学  
とは違う過ごし方をイメージして、いろいろと仕掛けをしていくといいと思う。いまま

であり来られていないような方に来てもらうという考え方ができるといい。それには、ターゲットが違うのではないかという話もあったが、同じようなセンスを持って一体的に見えて、両方が楽しめるような向きの方が来てくれるかなと思っている。抽象的な言い方だが、どんな人が来るかと想像しながら整えていくのがいい。

植田真委員：資料の中に「弥生時代のことを想像しながら学べる体験の提供」とあるが、いままでもいろいろとやってきていると思う。これからやることと、いままでやってきたことと、もう少し何かプラスアルファをしていかないと人がたくさん来てくれないということがあるのかどうか。もう少しこういうことをやったら今までの倍来てくれるだろうか、そういうことは考えておられるのか。

登呂博物館長：これから取り組むことで、どんな風の実現できるかは難しいところだと思っている。例えば火おこし体験については、実際に弥生時代の人がああいうやり方でやっていたかというのはまだもう少し研究の余地があると思っている。おそらく弥生時代はあんなにきれいに成形された木ではやっていないだろうし、やり方もいまのように便利ではないところでやっている。そういうところがもう少し忠実に再現できるようになれば、他の博物館とは違って例えば登呂博物館では火おこしはこうだと、よりお客様の満足度を高めることができる。火おこしごっこではなく、大人の方が満足できるような火おこし体験に昇華させていく。まずは弥生時代の景観を再現し、中でやることもよりリアルに再現していくという方向が、これから目指すべき方向だと思っている。

植田真委員：火おこしも田植えの方法も、できてくる古代米についても、もう少し学術的に掘り下げて、そういう方向でいったらどうかということか。

登呂博物館長：おっしゃるとおりだ。展示の見せ方や説明の仕方についても学芸員の力量が問われる。登呂は弥生時代の研究の出発点であるから、登呂博物館であればこういう展示ができる、こういう体験ができるということを、他の博物館と差別化して生み出すことが実現できればいいと思う。

文化財課長：もうひとつ、登呂博物館の特徴がある。平成5年頃に旧の登呂博物館をリニューアルした。当時は1階に民具がたくさん置いてあり、2階は登呂遺跡に関してのものが展示してあった。これを弥生体験ミュージアムと名前を変えて、1階を体験学習がメインで行える博物館にリニューアルした。全国でも初めて体験に特化してやった。それを平成22年に登呂博物館全体をリニューアルする中で、体験を一つのテーマにしようということで、博物館の中での体験と遺跡の中での体験について基本構想を作った。子どもたちは博物館に来て、博物館の中ではどうしても制限がたくさんあるので、1階では体験ごっこに近いような簡単な体験をやり、それを今度は遺跡公園の方で体験を本格化するというものだ。もう一つ、東名高速道路の下に体験サポート施設というのを作る。そこで、継続的に体験するようなこと、例えば木をくり抜いて食器を作るとか、機織りをするとか、どうしても何回も通わないとできないことを体験させる。博物館の1階ではセットされたものを少しだけ使わせ、それでやったような気になってしまうが、実際にモノができて満足感が得られないとなかなか頭には残っていないし、やはり実

際に五感を使うことが必要だ。お米を炊くと煙が出て臭かったり、目が痛くなったり、刺激のあることは本来たくさんあるはずだ。そういうことを全部やって、何度も足を運んでもらおうという計画がある。そういう形で体験のもっとリアルなもの、もっと高度なもの、もっと成りきったものにしていくと、リピーターなども増えると思う。弥生時代の理解ももっと深まる。登呂博物館の良さも伝わるのではないか。展示や体験の質を高めるというのはそういうところにある。

内山和俊委員：体験の本格化には大賛成だ。丸子に駿府匠宿があるが、あそこでは地場産品の体験教室をやっている。例えば、井川メンパの材料を組み立てて塗装して、一つのメンパにする工程があるが、それに数回通っている人がいるなど、大変人気がある。弥生時代に特化して、例えば水田などもそうだし、モノを作るという体験を本格化するのが非常に有用なのではないか。それが登呂遺跡の環境を高めることになると思う。それから、一日共通入場券も大賛成だ。パンフレットはいま別々だが、一体化して、共通入場券と一緒に登呂博物館と芹沢美術館と一体化したパンフレットを作ったらどうか。公共交通機関を利用して静岡駅から登呂遺跡まで行ったのだが、北口には観光コードがあり表示がしてあるのだが、登呂遺跡に行くにはバスが南口からしか出ていない。しかし南口には表示がなく、バスの乗り場も全然わからない。もうひとつ、バス停が「登呂遺跡前」という名称だけで、芹沢銈介美術館というのは全然出てこない。できれば「登呂遺跡・芹沢銈介美術館前」というように変えればもっとPRできるのではないか。

小泉祐一郎委員：異論になるが、体験の充実はもちろんやっていただき、リピーターには農業体験も含めてやっていただければ面白いと思う。しかし、お客さんの多くは観光施設に来た時の滞在時間が限定されている。今度来た時にやってみようというのはいいいが、その場でこの体験をやるか何分かかるのかということになると、次に行きたいところがあったりしてできないこともある。そのこの辺りのお客さんのニーズがおそらく大きく違う。関心を持たせるという点では簡単な体験で導入させた方がいい。はじめから本格体験だと、ハードルが高いと敬遠される可能性もある。そこはうまく両方を考えた方がいい。体験で一番引っ張るのは食体験だ。とりあえず食べてみる。導入する部分で体験ごっこから入ってもいいのではないか。体験ごっこだけで終わっているのが問題で、もっとやりたいという人には今度来るとこういうことができる、時間があればこういうことができると、そこら辺は分けた方がいい。

文化財課長：少し誤解がある。いま1階の体験でやっているのはあくまでも導入だ。それを外でやる。なぜ外でやるかというと、弥生時代にタイムスリップという、遺跡の中をもっといろいろと使って、そこで生活している、あるいは弥生時代の子どもたちがそこで何かをしているような、来た人がその雰囲気味わえるようなことを行ってきたい。動物園ではないが、生きたものには目が行くと思う。復元住居と倉庫があるだけでは当然つまらない。導入としては登呂博物館を使ってもらい、その先の部分をもう少し広げて行きたい。火おこしだけでなく、炊飯もそうだし、当時のタモがあるのでそれで魚を捕まえるとか、いろいろなことができれば一番いいと考えている。



小泉祐一郎委員：訪れた人が、土器を作っている様子を見られるとか、駐車場を出たら弥生時代の恰好をした農耕体験をやっている人を見られるとか、そういうシナジー効果が生まれれば素晴らしい。

内山和俊委員：ターゲットにするお客さんの滞在時間はせいぜい40分から50分だ。浅間神社にしても匠宿にしても大体そのくらいの滞在時間だ。食事をしながら見て回るとすれば、ほとんど体験はできない。体験するのはリピーターの人たちだ。魅力にはまって通ってくる。そのあたりを区別された方がいい。

小島孝仁委員：体験でリピートさせるのは難しいと思っている。体験は導入だと思う。何の体験か、どんな人に体験してもらうかが重要だ。一つのアイデアだが、旅行に行くときの動機や目的を考えたとき、子どもがいる家庭にとっては子どもが楽しく遊んでいる姿が見られる場所がひとつの目的地になると思う。いま用宗で古民家を使った宿を始めて一年半になるが、休みの日は東京、名古屋、大阪、神奈川あたりのお子さん連れのお客様がいらっしゃるケースが多い。子どもに田舎体験をさせたいということではいらっしゃる。登呂遺跡だったら、いまは手を入れていない水田の中で泥だらけにさせる。そのための衣装を貸し、シャワーブースを作っておく。これでおそらく入場料が取れると思う。なかなか泥だらけになる体験はそうそうできない。子どもを田んぼの中で泥だらけにさせるのはなかなか忘れられない記憶になるのではないか。親御さんはそれを見ている間に、弥生時代を説明する何かを読んで知ってもらおう。ひとつは子どもをターゲットにする。あとは、グループで来る若い人たちも泥だらけになれる場所があればいいのではないか。一人で行って泥だらけにはなる人はいないが、グループで来るからやるとか、子どもにならやらせたいと思うのではないか。田んぼを五感で感じるという点では一つのアイデアだ。それからオプションで火おこしセットも用意する。食べる体験では、さらに何かを見ながら食事をすると、すごく記憶に残る体験になる。過去にいろいろなところに旅行に行き、いろいろな食事をしてきたが、記憶に残っているのは、例えばバリではホテルのオープンテラスで民族の踊りを踊りながら食べた食事は忘れられない。食事にもエンターテインメント性を入れていくと体験としてはいいのではないか。

田形和幸会長：ここで10分の休憩とする。

#### 《休憩》

田形和幸会長：再開する。これまで皆さんからいろいろと意見を受けたが、事務局からまとめていただきたい。

事務局：いま、前回までもそうだが、いろいろとご意見をいただく中で、すぐに手を付けられそうなもの、すぐには無理で中長期的に考えなければならないもの、さまざまとレベル感の違うものが出てきたと思う。その中で市としてどこから手をつけたらいいか。西尾委員からもあったが、まずは市民に対してPRする、登呂博物館と芹沢美術館の価値を認識してもらうことを最優先にすべきなのか、それともブランディングが最優先なのか、ブランディングと言ったときにどのような手順でしていくべきか、次回答申の素

案をお示しする予定だが、答申のストーリーとしてどのような段階を踏んで最終的な目指す姿というものに近づけていけばいいのか、そこについてご意見をいただきたい。最優先で取り組むべきことはどこなのか、そのポイントはどこにあるのか、ご意見をいただければありがたい。

田形和幸会長：短期的にやれるもの、長期的に考えていくものがあると思う。できるべきところからやっていくべきだと私も思うので、皆さんの方から最優先でやるべきというご意見があれば伺いたい。

杉山茂之委員：私はどうしても数字から入る。前々回いただいた資料の入館者数を見ると、有料入館者数で25,000人程度だが、ここが増えないと収益が増えない。売り上げをどれだけ増やしていくかということで、入館者数を増やすということと合わせて付随した売り上げをどう上げていくかということになると、レストランやカフェの売り上げなど、一気に入館者数を増やすのであれば単価を上げていくということで、しっかりと採算ベースに乗せていくことはとても大事だと思う。一気に入館者数が上がらないとしたら一人あたりの単価を上げて、なおかつリピーターにつなげるような仕掛けをしていくという意味では、そこに付随したキッチンカーなのか、その中のリニューアルによってレストランやカフェを持っていくのか、そちらから入った方が私はいいと思っている。

小泉祐一郎委員：市民の人たちに関心をもってもらうためには、何かリニューアルなり変わったことがないと難しい。何も変わらないまま登呂遺跡のそもそもなんて一生懸命言っても伝わらない。日本平に夢テラスができたが、あそこに24日間で10万人が来た。ほとんど9割が静岡ナンバーの車だったわけだが。やはり何か新しい要素を入れることが必要ではないか。水田などもそんなに大きな投資をしなくてもいいわけだから、農業グループなりに最低限の費用を負担して体験をさせて、変わった感を取りあえず出していく。

田形和幸会長：景観を変えるということに対して、植樹という話が出た。枯れてしまうという話もあったが、それも一つは検討していただけないか。枯れる原因は水が多いからという話もあったが、それはなかなか直すことは難しいだろう。枯れないような木を植えることも検討する余地がある。植樹してもらうのにお金をとっていいと思う。自分の木として、名前を一本いくらかで入れて植樹してもらう。最優先でできることの中に単価を上げるということがあった。カフェとレストランができないのかなとも思う。上に行けば富士山が見えるということだし、そこにカフェテラスの併設も検討できるのではないかと思ったのだが、こういうことは可能なのか。

登呂博物館長：博物館の建物の中ということであれば、お金の問題だけだ。お金をかけてあの建物を改装することができれば、規制の対象ではないので可能だと思う。

事務局：懸念としては、行政でカフェを運営するのが難しいから、入ってくれる民間事業者があるのかどうかだ。実はミュージアムショップの民間事業者を募集したところ、なかなか手を挙げてくれたところがなく何度か募集をかけた経緯がある。なかなか人が来

ない中でミュージアムショップを運営したとしても儲かるのか、なかなか見通しが立たないので手を挙げにくいのではないかと推測する。鶏と卵の話になってしまうが、人を増やすのが先なのか、あるいはカフェなどの人を呼べるものを作ってから呼び込むことを考えた方がいいのか。

小島孝仁委員：いまのままのミュージアムショップではだれも手を挙げない。やはりリニューアルをして誰もがそこで運営したいと思えるものを作らないと、希望する事業者はいない。カフェだけではだめだと思う。やはり植樹も併せて、景観を良くしていくことを同時にやらなければならない。カフェだけでは、駐車場を降りてから登呂博物館に行くまでの間にテンションが下がってしまうと思う。もしカフェやミュージアムショップだけやってうまくいかなかったら、カフェ自体、ミュージアムショップ自体がダメなのだになってしまう。単価を上げるには、やはりそこは同時にやる必要がある。カフェ自体がリピーターを生む場所だと思うし、日常的にお金を落としていただく場所だと思う。体験や宿泊は入り口の部分で、いままで来なかった人たちを呼ぶという機能だと思う。

杉山茂之委員：やはり集客ができないとなかなか募るのが難しい状況だと思う。例えば、キッチンカーとイベントをセットで定期的にやっていき、少しずつその集客を増やしていく。もちろん景観の整備も同時に必要だ。導入段階としては、いきなりリニューアルするよりは、そちらから少しずつイベントで集客を行い、当然イベントの内容は相当面白くしなければならぬが、そういうことで話題性を少しずつ増やしていく中で、第二弾としてリニューアルに持って行った方がいいのではないかと。

事務局：イベントについて、いまはカンヌウィークの時の野外上映やマルシェ、それから登呂祭り、主にやっているものは年間を通してこれら2つくらいしかない。そのイベントをあの辺りの広場を活用し、キッチンカーなども併せて行い、面白いイベントが定期的にやられているということで、まずは人を呼んでみるのがいいのかと思う。

登呂博物館長：イベントをやっていないかといわれると、どんど焼きがこの前開催されたが、ほとんど毎月いろいろなイベントをやっている。それは博物館の中で体験イベントという形でやっている。それが一般の方が来たいと思うようなものになっていないということなのかもしれないが。イベントについては、これからやると言った場合に、いままでやっているようなイベントではだめで、全然違うものをやるということになると思う。その辺りはどのようなイベントであればいいのか。例えばどんど焼きではなく、石器づくりではなく、別のイベントであればいいのか。

杉山茂之委員：私は登呂遺跡とは全然切り離して考える。全く違う客層を集客できるようなイベントを作って、キッチンカーを併せて、中に入る仕掛けを作る。一つの方法として、カフェから入るのではなく、まずはミュージアムショップの方を直して、そちらに誘導させるようにすると、少しずつ中に入っていくのではないかと。中に入っていないとお金は取れない。イベントは外投げしてしまってもいい。

小泉祐一郎委員：外投げしないとだめだ。博物館が企画したイベントは、それはそれでや

ればいい。ところがいまやろうとしている話は、博物館の企画ではなく、イベントそのものが興行を打って場所代もそこが回収するという形で、外の企画でやらないとだめだ。もちろんコラボは必要だ。要は花火を挙げて目立たせてここに集まれというのは、博物館の企画である話の延長ではないと思っている。そういうことができる仕組みをどうするか。だから両方だ。

内山和俊委員：博物館でやれる事業については新聞報道でいろいろと出ていて非常にやっているなど感じる。いま話に出たカンヌウィークや登呂祭りは、それぞれ実行委員会が別々だ。うまくやるのであれば、実行委員会の人たちの話し合い、統一感を持たせることが必要なかどうかは分からないが、そういうことも必要なと思う。

小泉祐一郎委員：新しいことをやるのであれば、いままでのイベントの人たちと話をしてはいけないと思う。いままでやっていることを否定するのではない。いままでやっている人たちはこれまでどおりやっていただいている。それと同じ実行委員会、同じメンバーだと新しい話に発展しない。民間公募して社会実験的にやるからこういう条件で儲けてもらおう、そういう形でいいと思う。新しい人たちが考えて、その中で採択する。いままでの人たちを関わらせてはいけないと思う。登呂祭りは登呂祭りであればいい。

内山和俊委員：この前駿河区で学生がいろいろなアイデアを出して新しいイベントを実施するという話を聞いた。いまのカンヌウィークは実行委員会が全然別の団体で組織メンバーも違う。登呂祭りは地元の自治会とかいろいろな団体関わっている。それぞれの団体が独自の視点でいろいろと発揮しているのはいいと思う。いま駿河区で学生の若い感性でやろうとしているのも面白いと思う。それが皆さんの論議の中につながるかは分からないが。

駿河区地域総務課長：内山委員からお話があったように、今年度区長とのまちみがきセッションということで、学生に駿河区の魅力、資源を再発掘していただく取組がある。そこで、学生さんからは登呂エリア、登呂遺跡の周辺を使って学生が参加したくなるようなイベントをやってみたいと提案を受けている。来年度100万円の予算があるので、その中で考えて詰めているところだ。まちみがきセッションが終わって、実際に関わりたい学生が20名程度いるということで、その方たちと内容を詰めて、2月にまた話し合いを行う。学生さんなので、ミュージシャンが来てくれるようなフェスをやりたいと提案を受けている。新しいイベントをやるにはやはり新しい人たちがやらないと難しいと感じる。駿河区で100万円という予算を用意しているが、規模が大きくなれば100万円でどこまでやれるかはなかなか大変なところもある。継続してやっていくことについては少し課題があると話している。ただ、一度学生さんたちがやって、その後も自分たちが関わりたいところをつなげていければと思っている。そのあたりは新しいことができるのではないかと考えている。また企画が具体的になったら皆さんにご紹介したい。

鈴木貴子委員：100万円の限られた予算ということだが、若い人たちであればクラウドファンディングに抵抗がないと思うので、そうしたものを利用して資金を得ることで実施

が可能になるのではないかと思う。カンヌウィークの時はすごく多くの人が集まる。しかし、その後に人がまた来るかというところではなく、一過性のイベントになっている。登呂遺跡がある、芹沢美術館があるということを知らずに、それだけに来ている人が圧倒的に多い。来たら、何かそれを体験できるということが分かるように、知るきっかけを作っておくことが必要だ。夜間に映画上映がある。芹沢美術館も今後夜間の企画を検討されるということなので、せっかくだからその時に夜間特別開館というような形にして、登呂の方でも集客することが大事ではないか。タイムスリップとかディズニーランドの話があったが、人がいて盛り上がっている雰囲気づくりは大事だ。平日昼間に誰もいないところにポツンと一人していると本当に寂しい気分になる。しかし、たとえ寂しくても、スタッフの方が貫頭衣を着て水田を歩いているだけでもそこにタイムスリップしたという気分にはなれる。今現在は火おこし体験は時間制で、ある一定の時間でないと貫頭衣を着たスタッフはいない。それ以外のときは誰もいない。常に何をやるわけでもないが貫頭衣を着た人がうろうろすることでディズニーランドのキャストの人たちがいるような感じにもなれるのかと思う。時期によっては農作業をしている風景も見られれば楽しいかなと思う。何度も訪れるということだが、もともとこの施設の料金は高くはないと思うが、それこそディズニーランドや他の施設でもやっているような年間パスポートをそんなに高くない金額で発行することで、まずは地域の人たちがより足を運びやすくする。お友達が来た時にも、自分は負担を感じることなく行ける。また、年3、4回実施されている企画もののイベントも見ることができるといことで、これらは主に静岡市民向けのサービスかもしれないが、そういうことをする。あとは、スタンプラリーなどで静岡市内の美術館を巡っていくのも面白いのではないか。

坂野真帆委員：登呂エリアとしての情報発信をするべきだ。登呂博物館と芹沢美術館はパンフレットも全く別々で共通性のないものになっているが、同じパンフレットにすることも検討できる。ホームページもお互いにリンクし合い、一つの傘の下に二つある、登呂エリアにこれがある、という見え方にするのも方法だ。芹沢美術館のすごく限られたスペースの中にミュージアムショップがあり、限られたスペースでワークショップをやるということだが、例えば思い切ってミュージアムショップを登呂博物館と一体にして広いところに持っていき、ワークショップもそこでやれるようにする。組織的に合体させるというのが一番課題も多いことかもしれないが、一つの施設に見えるようにすることによって、登呂博物館に来た人があそこにはこういう展示があるとか、芹沢美術館に来た人がミュージアムショップは登呂博物館にあるということでもそちらにも足を運んでもらうとか。できるだけセンスを揃えていくことで両方見てもらえるようにする。せっかくだエリアの話をしているので、登呂エリアというか登呂公園というか、全体としてのPRを市としてしてくることも必要だと思った。

事務局：行政と民間の役割があると思う。行政は登呂博物館や芹沢銈介の価値を伝える、ある程度学術的な部分を担って情報発信し、体験のようなものを実施していく。賑わい作りはやはり民間の手を借りなければ難しいと思う。いま坂野委員から話があった、登

呂エリアの雰囲気づくり、ブランディングについては、事務局の中でも迷うところがある。登呂博物館、芹沢美術館ともコンテンツとしては全く違うものを持っている。連携させ、導線としてお互いに誘導させ合うことはおそらくすぐにでも手を付けられると思う。例えばミュージアムショップといったときに、置いてあるものが全く違う。全体としてのブランドを作るべきなのか、それともそれぞれを際立たせた上で、できる場所で連携する方がいいのか、会議の中では両論あるかと思っているがその辺はいかかか。登呂エリアは、登呂遺跡に関してはこれから景観を作っていくこともあり弥生時代が強く感じられると思う。そこから芹沢銈介はどう表に出していくべきなのか。全体としてのブランドをどのように作っていけばいいのか迷うところがある。

小島孝仁委員：芹沢美術館にしても登呂遺跡にしても、知ってもらうための入り口は多ければ多いほどいいと思う。ミュージアムショップを一緒にすることは売り場の作り方で十分その辺の見せ方は工夫できると思う。沖縄県のある観光施設で一番売れているお土産は「白い恋人」だ。結局、外国人は日本に来ているのだ。オーストラリアに行けばどこにでもコアラのぬいぐるみが売っている。できれば、登呂遺跡と芹沢銈介だけでなく、他の美術館も含めていろいろなものが置いてあるのがいい。どこの美術館に行ってもいろいろなものが置いてあるというのは、他の美術館を知ったり興味を持つきっかけになると思う。ハードを整備するにしても、今回は登呂遺跡の話だけだが、他の施設を巡ってもらうとなると、どんな巡り方をするかとか、ある程度その辺の横ぐしをさしたうえで考えていくことが必要だ。手前みそになるが、自社の最近オープンした温泉施設にも売店があり、その土産物には全国のものが置いてある。すごく目立つところに草津温泉饅頭が置いてあるが、よく買っていかれる。当然静岡のコーナーも作ってある。地元の方が日常的に来た時に地元のものなかなか買わない。地元の方はよそのものに興味を持つし、遠方から来た方のために静岡のものも置いてある。いろいろなものが置いてあるのは悪くない。見せ方だけだと思う。

小泉祐一郎委員：おっしゃるとおりで静岡空港の売店も何でもある。

田形和幸会長：皆様からご意見をいろいろ伺って、最優先に、できることからということでは、イベントもそうだが、この前駿河区の話もでたが、城南高校がそういうことを企画してくれたのであれば城南高校に投げてみるのもいい。私たち信用金庫協会でも磐田や浜松で軽トラ市を始めた。軽トラ市の場所だけ提供して、月に1回来てもらう。そこで思ったのが、お米をそこで売れないか。なかなか量が取れないから古代米を売ることができないかもしれないが。そういうイベントを企画して集客して博物館のことを知ってもらおうというのも一つの手かもしれない。それから導線というのも皆様から出たように、駐車場に降りたら少しタイムスリップして、水田を歩いて行って博物館に行く。そういう導線を作ってイメージをアップさせて博物館に来ていただくということがあると思う。なかなか費用対効果の問題と、植樹で大きい木をそのまま持ってきてすぐ植えられるかという難しい問題があるかもしれないが。ホームページの一体化などはすぐできるかもしれない。内山委員が言っていた体験型にしても1日、半日かけて行う体験

があり、ホームページを見てご家族連れでそれを目的に来てもらう。私も子どもが小さい時にアクティ森に行ってそこで体験したりした。匠宿では1時間程度で竹細工を作ったりするが、観光客はやはり40分とか50分の滞在時間になるため、ターゲットによって違うイベントを作ることも必要かもしれない。最優先にできること、1年後2年後、またその先だったらこういうことができるというように事務局の方でまとめていただくか。ただ、そうは言ってもまずは来ていただくことを大前提に考えなければならないと思うが、その辺りも含めて事務局でまとめていただくことでよろしいか。

事務局：次回答申の素案ということで、これまでの議論をまとめてお示しする。そこで意図が違うということがあればご指摘いただき、最終答申という形にまとめていく。今度は文章でそれなりの長さのものができると思うので、なるべく早い段階で皆様にお示しできるようにメールで送らせていただくので確認をお願いしたい。

田形和幸会長：それでは本日の議事はこれで終了する。

静岡市行財政改革推進審議会

田形和幸

